有形の悪意

二丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
有形の悪意

【Ｎコード】
Ｎ６７１３Ｌ

【作者名】
二丁

【あらすじ】
パンフレットより

”二人の科学者にとらえられた少女。残酷な実験に耐えかねた少女は脱出を図る。マッドサイエンティストの手から逃れることはできるのか！”

（前書き）

第７回ミステリーズ新人賞応募作品。
もともと脚本として書かれたものを小説化しました。
原型の方も投稿しています。

２０１１／４／１１　修正

有形の悪意

二丁（にちょう）

なぜ家を出たのか、妙なことだがはっきりと思い出せなかった。腕時計を見ると、午後七時をすこしばかり過ぎていた。一時間ほど歩いた計算になる。辺りはとうに暗い。何時の間にか馴染みのないところまで来ていた。馴染みがないといっても、今の住居に越してから、最低限の買い物以外は外に出歩いていないので、まだ知っている場所の方が少ないのだが。

雪の降る夜だった。耳が痛い。手で温めても一向に楽にならなかった。雪国の冬は初めてだが、ここまで冷えるものだとは思っていなかった。まだ吹雪というほどではないが、次第に雪は勢いを増しているようだった。そういえば、今朝見た天気予報では警報が出ていたような気がする。こんな日に出歩くのだからそれなりの理由があったはずなのだが――。

誰かの言葉を借りるなら、これも「物語の要請」というものなのかもしれない。

しばらく歩くとT字路に出た。左に曲がると、途端に目の前が真っ白になった。私はこのまま轢かれてしまうのだな、と直感的に悟ると、小さなころの記憶から順繰りに目の前の光へ映写されていった。両親に内証で猫を拾ってきた私、猫に飽きて焚火に放り込む私。――走馬灯という奴なのかもしれない。思っていたより面白いものだ。

次第に目が慣れたのか視力が戻ってきた。どうやら車は来ていなかったらしい。

通りは行き止まりになっていて、一番突き当りにある洋館から強

いライトで照らされていた。雪に反射して私の眼を刺したようだった。落ち付いてみれば、お笑い草だが、話に聞く走馬灯を体験できたので良しとした。別に誰に見られて恥をかいたわけでもない。それにしてもあのライトは何だろう。

二階建ての、柵で囲まれた小振りな洋館だった。いたるところに蔓が巻きつけてあるが、古くなっているのか、ところどころ腐っている。火を点けると綺麗に燃えそうだ。

町中が寝静まった丑三つ時に、マッチを握りしめている自分を妄想した。火を点ければ綺麗なのだろう、けれど中の住人はどうなるのだ？　私はマッチを弄びながら考える。時折擦っては火を眺め、踏み消した。火を点けたら大声で叫ぼう、窓を割ってもいい。とにかく騒ぐだけ騒いでから離れよう。そう自分に言い聞かせると、私は新しいマッチを擦って蔓に近付けた。

炎は初め線香花火のようにゆっくりと広がっていったが、二次関数を描くようにすぐさま激しくなり、種火が私の指を焼くころには取り返しのつかない炎に成長していた。

私は軸が燃え尽きたことに痛みでようやく気付いて投げ捨て、すぐに門まで駆けだした。通りに飛び出したところで、私は倒れこんでしばらく動けなかった。罪悪感を感じていたわけではない、ついにやったという達成感が脳内麻薬になって頭の中を駆け巡っていた。βエンドロフィンに酔いながら体をねじらせて後ろを向いた。乾いた炎は既に洋館全体をきつく抱きしめていた。成す術なく焼かれていく洋館は強姦される少女のようで、私は呆けた顔でその情事を観賞した。今まで観たどのポルノ映画よりも背徳的だった。

ふいに正面の扉が開いた。私は住人に火事を知らせるという当初の良心のかけらを取りこぼしていたことにようやく気付いた。何か生き物がゆっくりこちらに歩いてきた。人間ではなく生き物だと瞬間的に考えたのは彼が病的に小柄だったからだ。子供だと考えなかったのは彼の顔に刻まれた無数の年輪のせいだった。彼は私を無表

情のまま見下ろすと
「お客様、いかがなされましたか」
と言って、頼りない手をこちらに差し伸べた。

私は覚めた。

「足を滑らせてしまって……。すみません」
手を借りて起き上がるとコートに付いた雪を払った。中まで水がしみ込んでいて体が冷える。目線を上げるとライトを直接見てしまい、目が眩んだ。そういえば、私はこのライトが気になって館の前まで来たのだった。
「チケットを拝見いたしましょう」
彼が言った。するとここは劇場なのか、合点がいった。
私は改めて彼を観察した。先天的なものなのか後天的な病気によるものなのかは分らないが、先述した子供の体を、どこかの探偵が着ていたような鴉色のタキシードに包んでいる。癖なのか、右手で顔の皺を撫でるとシルクハットを取り私にお辞儀をした。彼の禿げあがった頭頂部が私の目線に重なり、可笑しかった。
「通りがかりにここがライトアップされているのが気になって観に来たのですが。……劇場なのですか？」
私は禿鴉に聞いてみた。
「左様です。とすると、チケットはお持ちではないのでしょうね。当日券も御座いますが、宜しければ観劇なさっていかれませんか」
禿鴉は門の横手にある張り紙を手で示した。

演目　有形の悪意
劇団　ＯＴＣ
脚本・演出（ありかわ）　有川（あずま）東

「観劇はよくする方ですが、聞いたことのない演目ですね。ここの

オリジナルなのですか」
「この劇団の作品でございます。団長の有川が書いた話でして、身内の贔屓目を差し引いても、なかなか良くできた作品だと私は思っておりますが……」
私は財布を探った。幸い万札が数枚入っていたので、観劇する意思を告げると禿鴉は中へ通してくれた。

入ってすぐのエントランスにはコーヒーテーブルが幾つ並べてあり、次の幕を待つ間休憩できるようになっていた。しかし今は人気が無く、テーブルライトが寂しさを引き立てていた。既に演目が始まっているのだろうか。
「今来ていらっしゃるお客様はすでに皆さん劇場へ入られていますが、まだ開演までは二十分ほどございます。お身体が御冷えでしょう？　観劇なさる前にコーヒーでもおあがりになさいますか」
「はあ、そうですね。いただきます」
禿鴉がコーヒーを入れてくれる間、私はコーヒーテーブルに肘をつきながらこの劇団のことを考えていた。先述したが、私はかなり観劇をするほうでそれなりにマイナーな劇団もよく知っている。しかしＯＴＣという劇団にはまるで聞き覚えがなかった。この劇場（元々は違ったのかもしれないが）は随分古い建物のようだが、劇団自体はかなり最近できたのかもしれない。それにしてもＯＴＣとは何の略称なのだろう？

「？妄想狂の劇団？ということですよ。　Ｏｂｓｅｓｓｉｖｅ　Ｔｈｅａｔｒｉｃａｌ　Ｃｏｍｐａｎｙ」
いつ座ったのか、禿鴉が私の向かいでコーヒーをすすっていた。私の前にも湯気の立つカップが置かれていた。
「妄想狂というのは、団長が劇団を立ち上げる以前の仕事のお仲間に嫌味で付けられた仇名なのですが、本人は面白がっていたようでしてね」

「以前の仕事というと、脱サラして劇団を立ち上げられたのですか？　随分思い切ったことをしたものですね」
「いえ、地元の大学で教授をしていたのです。半分道楽のようなものだったようですが……団長のお父上が不動産をいくつも持ってらっしゃって、幾つか譲り受けていたそうですから、生活に窮する心配がなかったので、気の向くままに続けていたそうです。お父上の死後、長い間観劇を趣味としてきた団長は、大学を辞めてこの劇団を立ち上げました。私はちょうどそのとき職にあぶれていたところを拾われまして、舞台には立ちませんが支配人のようなことをさせてもらってるんですが……ああ、そうだ。これをお渡ししようと思ってコーヒーと一緒にお持ちしたのですが」
白い無地のＡ４に？有形の悪意？と明朝体で刷られていた。パンフレットのようだった。コピー刷りの安っぽい作りだった。中を開くと内容の簡単なあらすじと場面写真、ＯＴＣの紹介が書かれていた。ＯＴＣの紹介は先ほど禿鴉が話してくれた内容とほぼ同じだった。

有形の悪意　粗筋
二人の科学者にとらえられた少女。残酷な実験に耐えかねた少女は脱出を図る。マッドサイエンティストの手から逃れることはできるのか！

主要登場人物
シモーネ（少女）池川直美（いけがわ なおみ）
ギデオン（科学者）有川東
ウォーカー（科学者）坂本達人（さかもと たつひと）
エリック（刑事）福本清（ふくもときよし）
ジャック（？？？）友永秀正（ともなが ひでただ）
プライス（ジャックの息子）安藤慶一（あんどう けいいち）

場面写真が二枚掲載されている。一枚は寝台に横たわった少女を背に、二人の男が何やら話し込んでいる場面。これは粗筋にある二人の科学者だろうか。もう一枚は科学者二人と長身の男が対立している場面だった。少女は長身の男にすがりつき助けを乞いているようだった。

「あと数分で開演になります。そろそろ会場に入られた方がいいでしょう」

禿鴉が言ったので私は席を立った。結局私はコーヒーを口にしなかった。

「座れるでしょうか。雪道を歩いてきたので立ち見となると、足が辛いのですが」

「ご心配なく、常連のお客様が数人入っているだけですから。普段ならそれなりの入りなのですが、この天気でございますからね……」

禿鴉の言った通り、会場には数人の客がいるだけで、どこでも良い席に座ることができた。学校の講堂よりもやや広い空間に、十列ほどの座席が一段ずつ高くなって設置されている。座席の真ん中は舞台から出入り口までまっすぐ通路になっていて、役者が客席に出てきたり、出入り口から舞台に出ていく演出などができるようになっていた。

私は前から二列目の通路の傍に座った。開演まであと二分少々間があった。貰ったパンフレットを読み返して間を潰した。申し訳程度に会場を照らしていた照明が落ちた。いよいよ開演のようだ。私は座り直して足を組んだ。この態勢がいつも一番話に集中できるのだ。

舞台中央をピンスポットが照らした。幕の内側から禿鴉がさっと登場すると、スポットの位置まで進み帽子を取って辞儀をした。例の禿げあがった頭頂部が露わになったのだが、今度は不思議と可笑しくなかった。それどころか、ある腫の風格さえ感じさせた。

「長らくお待たせいたしました。我々ＯＴＣが今夜演じます演目は

?有形の悪意?でございます。ごゆっくり御鑑賞くださいませ。また、演目中はどうぞお静かにお願いいたします。お客様という役に台詞は御座いませんので……」

禿鴉が内側に消えると同時にピンスポットも消え、低いブザーが鳴った。黒ビロードのカーテンが、そのとき、わずかにそよいだ。

小さな痙攣めいた動きがすばやく走りぬけると、やおら身を翻すようにゆるく波を打って、少しずつ左右に開き始めた。やがて完全に開ききると同時に強いシーリングライトが点いた、と思った瞬間ライトは一度切れかけた裸電球ほどに弱くなり、次第にずつ光度を増すと舞台がくっきり見えるちょうど良い明るさになった。

中央よりやや手前に、パイプ椅子が向かい合うようにして並べられている。一方の椅子には初老の男がゆったり腰をかけている。もう一人青年が舞台にいるのだが、こちらは椅子の周りを落着きなく歩き周っている。二人とも白衣を着ているので、例の二人の科学者らしいと判った。初老の方が口を開いた。するとピンスポットが二人を照らし、全体を照らすシーリングライトは落とされた。

「ウォーカー君、こんな疑問を持ったことはないかね。私たちが認識している現実が……そう、例えばある舞台の一幕なのではないか、そんな感覚を覚えたことはないかね？　今我々は自分たちの研究所にいる、と認識しているが、本当はグランギニョール劇場の舞台なのかもしれない。或るいはどこかの学校の講堂なのではないか……？」

どうやら、初老の方が団長有川が演じるギデオンらしい。ウォーカーはギデオンに背を向けて足を止め、少し考えてからゆっくりと振り向いた。

「ありふれた空論ですね、思春期を迎えた子供がよく陥りがちな」

「馬鹿げた考えだと思うかね？」

ギデオンはタバコに火をつけながら訊いた。

「あたりまえでしょう。確かに、反証は不可能ですが……」

「本当に馬鹿げた考えだろうか？　君は研究者などではなくどこか

の劇団の役者なのかもしれない。いやもしかすると、どこかのハイスクールの生徒なのかもしれない。発表会を目指して毎日稽古に励む真面目な生徒が、君という似非の存在を演じているのかもしれない。彼は君を自由に操ることができるが、その逆は決してありえないんだ」

ギデオンは床をじいっと見つめると親指の爪を噛んで苦々しい顔をしてみせた。

「いったいどうしたっていうんです。なぜ、こんな話題を？」

「そこだ。重要なのはそこだ、ウォーカー君」

ギデオンは顔を上げた。

「判らないんだ。私はなぜふいにこんな疑問を持ったのだろう。ほんの少し前まで、こんな議論をふっかける心算なんてなかったんだが……。まったく、まずい　Ｗｈｙ　ｄｏｎｅ　ｉｔ　だ。それこそ私を作りだした脚本家と役者が、私に言わせた台詞なのかもしれないな。例えばこんなあらすじはどうだ――二人の科学者にとらえられた少女。残酷な実験に耐えかねた少女は脱出を図る。マッドサイエンティストの手から逃れることはできるのか！」

ギデオンは椅子から立ち上がるとせかせかと歩き始めた。かわりにウォーカーが椅子に腰をおろした。タバコが吸いたくなったのかポケットを探ったが、切らしていたようで舌打ちをした。

「吸うかね？」ギデオンが携帯灰皿に灰を落としながら訊いた。

「いえ、重いタバコを吸うとどうにも頭が冴えなくなるので……ただでさえ徹夜でパフォーマンスが下がっていますし」

ウォーカーは手を振って断ったが、やはり吸いたいらしく貧乏ゆすりをした。

「あなたもお疲れなのでしょう。一度深く眠られれば妙な強迫観念も薄れるのでは」

「そうもいくまい。せっかく君が新しく二人目を用意してくれたところだ。一気に研究が進める絶好の機会なんだ。しばらくは眠る時間が惜しい。本当ならばこうやって休憩を取るのも惜しいのだが、

度々こいつをやらないと体がストを起こすんでね」
　笑いながらギデオンはうまそうに煙を吸い込んだ。ウォーカーも愛想笑いを返した。彼はすぐにその笑いを引っ込めると居心地悪そうに座りなおし、話題を変えた。
「それはそうとして、先日お話した件は考えていただけましたか？」
　ギデオンはタバコを灰皿に落とすと椅子に戻った。笑みは消え顔をしかめていたが、不機嫌そうには見えなかった。
「君の提案は理解できないわけじゃないが、私は好かんね。出資者を募るとなると彼らの意向に反した身動きがとりにくくなる。それに今日の実験のこともある。前回と違って、明らかに法に触れるんだ。危険な要素は増やしたくない。何度か繰り返すことになるかもしれないしな」
「しかし、今のままでは後腐れの心配のない被験者を探すこともままなりませんよ。二人目を私が確保するのにいくら使ったかご存知ですか。資金の四分の一は消し飛びましたよ。前回のような手はもう使えませんし……。そろそろ手を打たなければ、いずれ立ち行かなくなります。注意深くやれば、違法な人体実験だって隠し通せるでしょう」
　声こそ荒げないがウォーカーはかなり興奮しているようだった。私はウォーカーの演技に感心した。仕草の一つ一つに不自然さを感じなかった。ウォーカーの役者の名前を思い出せなくなり、私はパンフレットをめくった。
　坂本達人ほどではないが、有川の方もなかなかのものだった。通りの良い声で、詰まることなく長台詞をこなしている。老人を演じるのは難しいものだが、かなり場数を踏んできているのだろう。
「やはり一本頂けますか。この際、ずっと重いやつを吸いたい」
　ギデオンは一本渡して火を点けてやった。
「それを吸ったら準備にかかるとしようか。この話はここまでだ」
　そう言うと、ギデオンは吸い残ったタバコを灰皿に落とした。携帯灰皿の閉じる音を合図にして、スポットが消えた。薄闇の中、ウ

ォーカーが吸っていたタバコの火蛍だけが浮いていたがすぐに消えた。スポットが消えると同時に、道具の配置を変えやすいようフットライトが点されたので、音を立てずに動く二人の姿が薄ら見えた。ほんの十数秒ほど衣擦れの音と押し殺した息の気配が続き、シーリングライトが点いた。

パイプ椅子は片付けられ、代わりに寝台が置かれていた。こちらから見て縦になるよう舞台中央に配置されていた。作業台のようなものが寝台の横にあり、メスや医療用鋸等の手術器具と、何に使うか判らないが光沢のない四角い貯金箱のようなものもあった。箱からは何本もワイヤーのような線が飛び出ている。拳二つ分ほどの大きさのようだった。小さなモニタとＰＣも乗っていた。手術室のつもりらしい。他にはこれといった道具もなく、味気ないような、安っぽいような印象を受けた。先ほどのシーンもそうだったが、背景などの大がかりなセットは一切ない。必要最低限の道具しか使わないようだった。

寝台には薄緑のシーツに包まった女性が頭をこちらに向けて寝ていた。彼女が例の少女なのだろう。パンフレットで確認すると、演じているのは池川直美という役者だった。寝台のこちら側には仕切りが立っていて、寝台の右半分と少しを隠していた。ウォーカーとギデオンの二人は下手で打ち合わせをしているようだった。口を動かしてはいるが、実際には言葉を口にしていない。二人はビニールで作ったエプロンのような物を身に付けた。本物の医者が手術で使うようなしっかりとした手術着ではない。鼻まで覆ったマスクが少し息苦しそうに見えた。ギデオンはバインダーに挟んだ書類に目を通していたが、読み終わるとウォーカーに押しつけた。二人は寝台によるとアルコールで手を軽く消毒し、ゴム手袋をはめた。

「被験者は十代後半の白人女性、体型は標準。事前に検査した結果、ごく軽度の栄養失調が見られましたが許容範囲内でしょう。手術に耐えうる十分な体力を持っているものと思われます。現在は全身麻酔で昏睡状態です。買い付けたブローカーには買春目的だと匂わせ

ておきました。金もきっちり用意し、目の前で確認させましたから後々厄介事になる心配はないでしょうね」
　ギデオンは頷くと少女の顔を撫でた。
「氏名は？」
「本名は不明ですが、ブローカーからはシモーネと呼ばれているようでした」
「シモーネ……シモーネ……あまり気に入らんな」
「そうですか？　私は悪くない呼び名だと思いますけれど。たしかブラジルにそんな名前の歌手がいたな。実際に聞いたことはありませんが」
「シモーネ・ビッテンコード・オリヴィラだ。背の高い女性歌手だよ、こっちは小柄だが、身長は幾つだね」
「百四十五センチメートル。体重は四十五キログラム」
「血液型は？」
「Ｂマイナス。輸血用血液は十分用意しておきました。それと報告するまでもありませんが、脳は既に分析して回路に書き込み済みです」
　ギデオンは手を叩いた。ドーランを塗った頬が上がり、マスク越しに笑った。首尾よく獲物を手に入れた悪党のように卑しさが垣間見えた。
　ギデオンは作業台を覗いて、道具を点検し始めた。メスを持ちあげて照明にかざしながらギデオンは言った。
「もし三人目が必要になった場合、同じ筋から仕入れられるかね？」
「できなくもないでしょうが、金はかかりますよ。それに少し時間も。メール一つで発送してくれるわけではないですから」
「そうか……まあ今は目先のことに集中しよう」
　メスを弄びながらそう言うと、ギデオンは寝台に向かい合った。大きく深呼吸をして首を回した。小枝を折ったような音が鳴った。
　それを合図に上手側、下手側からそれぞれピンスポットが寝台と彼らを照らした。シーリングは落ち、赤黒いホリゾントライトが点

された。ホリゾントに浮かんだ二人の影が古い映画の吸血を思わせた。或るいはフランケンシュタインか、今までの話の筋から考えてこっちの方が適当そうだ。老いた方のヴィクター学生はメスを持った手を仕切りの奥に伸ばした。仕切りは切開する部分を隠すために設置してあったようだ。何度か腕を動かすと、メスをウォーカーに渡した。

「皮膚を切開した、ドリルをとってくれ」

ウォーカーは手回し式の小さな医療用ドリルを観客に見えるように取り出すとギデオンに渡した。ギデオンはそれを一度目線まで上げて、不具合がないかもう一度点検するような仕草をしてから先端を頭部に向けた。ゆっくりとハンドルを回すと不快な低音が響いた。硬いものに異物を無理に押しこんでいく様が容易に脳裏に浮かんだ。仕切りの向うでは石にドリルをねじ込んでいるのかもしれない。しばらくの間不快な演奏を続けた後、ギデオンはドリルをウォーカーに返すと息を吐いた。

「次は糸鋸だ……いや、その前に汗を拭いてくれるか」

本当に汗をかいているらしく化粧が滲んでいた。スポットライトが暑いのだろう。ウォーカーはガーゼを化粧が落ちてしまわないよう軽く押し当て汗を吸わせた。

「もういい、鋸を」

ガーゼを作業台に下がっていたビニール袋に放りこむと、ウォーカーは黙って鋸を差し出した。受け取るとギデオンは先ほどと同じように頭に当て、力強く引いた。演奏会の第二楽章が始まった。断続的な切断音を聞いていると自分の頭蓋を内側から切断されているような錯覚に陥った。

最後のデクレッシェンドを終えると「メス、それとボウルを準備しておいてくれ」と言いながら鋸を返した。ウォーカーはメスを渡すとステンレスのボウルを持ってギデオンのそばに寄った。ボウルには何か液体が張ってあるようだった。

ギデオンは少しメスを動かしては手を止めると、引きちぎったス

ポンジのようなものをボウルに入れていった。すぐにボウルは水を吸ったスポンジでいっぱいになった。血糊を含ませてあったのか。水を吸うと飲み頃が過ぎたワインのような液体が滲みだし、不快感を放ちだした。私は少し気分が悪くなった。簡単な小道具なのだが妙に生々しい。外の空気を吸ってこようかとも思ったが、やはり上演中に席を立つことには気が咎めたので、椅子に座りなおして態勢を楽にすると話の成り行きを見守った。

すべて摘出し終えたのかギデオンはメスを戻すと吸引機を要求した。プラスチックの筒から細いゴムチューブが伸びているような物で、ギデオンはチューブを例によって仕切りの奥に伸ばした。液体を啜る汚い食事のような音が第三楽章だった。しかしこれはラストに鳴らすシンバルのような立ち位置らしく一瞬で私の頭に印象を残すとすぐに止んだ。

「よし、いいだろう。繋げるぞ、準備してくれ」

ウォーカーは吸引機を受け取る代わりにペンチと開口器を渡した。自分はワイヤーの出た箱を持って、緊張し始めたのか深呼吸をした。ギデオンは開口器で傷口を開くような動作をした。

「入れてくれ。ゆっくりな」

「判っていますよ」無愛想にウォーカーは答えると、時間をかけて仕切りの向うに箱を置いた。ギデオンはそれを確認すると顎でモニタをしゃくった。ウォーカーはモニタについた。しばらく顎を撫でながら画面を見つめて考え込んだ。ギデオンはペンチを使って手際よくワイヤーを繋ぐべき個所に留めているようだった。また汗をかいてきて頬に伝ってきているのだが、まるで気にもとめないで手を進めた。一段落ついたのか、ギデオンは自分でペンチを作業台に戻し汗をぬぐった。

「どうだね？」

「今のところ問題ありません」

そういうとウォーカーは幾つかキーを叩いた。

「一度起動させますか？」

「処置は全部済んだ。最小限の動作確認だけやってみてくれ。うまくいったようなら縫合して全ての機能を動かそう」
頷くと、ウォーカーは再びキーを叩いた。眉間に皺を寄せ画面を睨みつけながらギデオンに報告した。
「電源は周りは問題ありません。断線もなくすべての部位に電流が届いています。電圧も零点一二ボルト前後で安定。冷熱もうまく動いていますね、温度は適切です。各神経との接続も……いや視神経がＮｏｔ　Ｆｏｕｎｄ　Ｄｅｖｉｃｅになっています。確認してみてください」
ギデオンは再びペンチを手に取るとシモーネに近づいた。
「直りました。他の神経には問題は見当たりません」そう言いながらキーを幾つか同時に押した。
「よし縫合しよう」
ドリルを手に取ると、ギデオンは頭にあてがって少し回し、位置をずらすとまた回した。それが済むと白いセラミックかプラスチックのような物で作られた、つぎと針をさりげなく観客に見せながら手に取り、縫いつける演技をした。
「待ってください。表示が変です」
「どうした？」とギデオンが言い終わると同時に、シモーネからビープ音が鳴った。
「おい、どうなっているんだ」
「理由は判りませんが、各神経が認識されていません。他の個所には今のところ異常は見られませんが……」
ギデオンは舌打ちするとメスを持ってシモーネの頭をまた開き始めた。明からに焦りを見せていた。スポットライトが赤く変わり舞台の上を駆け回り始めた。
「よりによって神経だと……あまり時間を置くと起動しても心臓が動かん」
「内部の温度が上がっているようです……冷却機能が原因なのか……？」

ウォーカーはキーを叩き何か入力するとエンターを押した。またビープ音が鳴った。
「駄目です、強制終了しました。リセットをかけてみましたが、すぐに画面が青くなります」
「配線が焦げついてやがる！」
ギデオンは諦めて作業台を蹴った。器具が幾つか床に落ちた。スポットライトがまた二人を照らす。色はもう戻されていた。ギデオンは興奮して息を荒くしていた。まるで溺れかけたようだった。ウォーカーも冷静には見えなかったが、ギデオンよりは幾分ましには感じた。
「……落ち着きましょう。少し一息いれませんか？コーヒーを飲めば気分が軽くなるでしょう。それから原因を追及しましょう」
ギデオンは歯ぎしりをし、ウォーカーの進言にも上の空でメスを弄んでいた。舌打ち一つをすると寝台に近づき、何か呟きながらメスを持ちなおした。彼は叫んだ。
「役立たずが！」
そしてギデオンはメスを振り上げるとシモーネの腕に突き立てた。突き立てるふりではなかった。マジックナイフか、と私は瞬間的に考えた。マジックナイフなら刃先まで完全に軸に納めるようにしなければ刃と傷口との境目に先の細い刃先が来て不自然に見えるはずである。しかしこのメスは刃が半分ほどしか刺さっておらず、境目も別段不自然ではなかった。それに刃がめり込み、肉が裂けている部分が見えた。
彼は本物のメスを突き立てたのだ。人形に突き立てたのならばあんな傷口はできないはずだ。目を細めてみると、二列目とはいえやや距離があるのではっきりとは断言できないが、彼女の腕には他に幾つも刺し傷らしい跡があるように見えた。やはり彼女は上演の度に、本当に本物のメスで刺されているようだった。
私が唖然としていると傷口から赤い泥のかたまりのようなものが溢れ出てきた。ギデオンはまだ気が済まないらしく寝台を派手に倒

した。転げ落ちた弾みでメスが抜け、血が舞台に飛び散った。仕切りで隠れていた頭の右半分が赤く染まっていたが、これは血糊だとすぐに判った。単体だと見分けがつきにくいが、腕から流れる本物の血液と比べると色が鮮やかだった。ギデオンはシモーネに痰を吐きつけると顔面を蹴った。少しも手加減をした様子はない、鼻が折れたらどうするつもりなのだ。

私は演技に圧倒されるより先に、この劇の演出家は頭がおかしいのではないか、と至極一般的な感想を抱いた。役作りの為に髪を切らせたり体重を減らさせたり、戦争映画などでは実際に訓練を受けさせたりといったようなことはよく聞くが――平手打ちとはわけが違うのだ。動脈を外せばまず死にはしないだろうし、顔面を蹴ったところでも悪くて骨折ですむのだろうが、実際に暴力をふるう役者にも、そう指導する演出家にも（どちらも有川だということにこのとき気付いた）江戸川乱歩が描いたような、倒錯した猟奇的な人格を感じた。もっとはっきり言ってしまうと、私はひどく不愉快だった。これほど不快になったのは初めてかもしれない。

ギデオンは足をシモーネの頭に載せた。そのまま体重をかけようとしたようだったが、急に体中を脱力させるとそのままふにゃりと倒れてしまった。白目を向きだらしなく舌を出している様が間抜けだった。鼻から茶色い液体が流れ出し頬を伝った。ウォーカーはこの一連の事情には無関心の体でモニタを眺めてぼんやりしていたのだが、ギデオンが倒れているところをにふと目を向けると、とても不思議そうな顔をした。

奇妙が間が空いた。台詞が飛んだのだろうかと私が思い始めたとき、ウォーカーは苛められている小学生のようによろよろと立ちあがった。ギデオンに近寄り首筋に手を当てた。口元をひきつらせると転がっていたメスに飛びつきギデオンの衣服を破いた。心臓に手を当てなれない手つきで数度マッサージをし、人口呼吸をした。それを何度辛抱強く繰り返したが、結局ギデオンは白目を向いたままだった。鼻から茶色い液体が流れ出した。

ウォーカーはそのまま座りこんで途方にくれているようだったが、やがて何をすべきか思い出したのかぐったりしているシモーネに飛びついた。彼女の血はもう止まっていた。最初に感じたほどの怪我ではないのかもしれない。それでも生乾きの傷口は痛々しかった。

ウォーカーは血糊を塗った頭部に顔を近づけ観察すると胸に耳を当てた。彼はシモーネを抱きかかえると寝台に丁寧に寝かせ、自分はモニタの前に戻った。画面を力なく眺め呟くように「起動しているようだ……」と言った。また、奇妙な間が空いた。ウォーカーはじっと何か考えているようだったが、台詞を思い出したのか、意を決っすると先ほどの弱々しさを挽回しようとするような大声を必要以上に張りあげた。

「起動している！　危ないところだったが実験は成功したのだ！　だが、ギデオンはいったいどうしてしまったのだろう。脈が止まっていた。心臓マッサージをしてみたがそれも無駄に終わってしまった！　彼はなぜ死んでしまったのだろう……」

ウォーカーはまたちょっとの間黙り込んだ。

「ともあれ彼は死んでしまったのだ！　上手く立ち回らなければ。彼には肉親も私以外に親しくつき合いのあった人間もいない。彼の遺言状には恐らくこの研究所件自宅を私に譲ると書いているはずだ。となると、彼の死を黙殺してしまうわけにはいかないが……ちょうど私はこの研究を公表し、スポンサーを探そうと提案していたのだからこれは良いきっかけになるかもしれない。しかし彼女はどうするべきか……彼の死を公式に処理しなければならない以上、ここに警察連中を入れないわけにはいかなくなるだろう。今の実験で得たデータを保存したら処分してしまおう！」

それだけ言いきると、ウォーカーはさっさと上手に引っ込んでしまった。スポットライトが彼を守備範囲から逃がしてしまうと、捨てられた飼い犬のようにぐずぐずとその場に残っていたが、やがて消えた。会場がほんの少しざわついたような気がしたが、私がそう思い意識を集中させてみたときにはもう元の息を殺した静寂が戻っ

ていた。
誰も舞台の小道具を片付けようとはしなかった。このまま次の場面に進行するのだろうか、と考えていると舞台袖からようやく何人かが出てきて小道具を戻し始めた。シモーネは寝台に載せたまま、ギデオンは二人がかりで抱えられて上手に運ばれた。
運び終わると、なんの案内もないまま私は数分ほど待たされることになった。場面転換に何分もかけるというのは少し考えづらい。休憩に入るならばその案内が必ずあるはずだが。
私は何か事故があったのだろうか、と考え始めた。
シーリングライトが点灯した。
舞台中央に一つデスクが置かれていた。ウォーカーが繁雑に散らばった書類を整理し、書き物をしているようだった。そこへ下手から初めて登場する男が現れた。パンフレットの写真ではシモーネを守ろうとウォーカーとギデオンのコンビと対立していた長身の男だった。
そこで私はまた疑問を持った。ギデオンはつい今しがた死んだはずである。ついでに言うならシモーネもウォーカーに処分されたはずだった。この先何らかの理屈をつけて再登場するのだろうか？
しかしシモーネはまだしもギデオンは、はっきりと死んだと明言されてしまっていて、ここから理由をつけて再登場させるというのはかなり苦しいのではないか？　やはり予定外の事故が起こったのではないかと不安になったが、事故が起きたのならば、必然的に公演中止になるのだが、そうなっていないということは、事故が起きたにも関わらずしかるべき対応をとっていないということだろうか？
しかしそれも矛盾しているような気がした。警察を呼ばずに公演を続行するということは、この劇をやりきりたいから黙っているということだ。ならば現実として起きているこのずれをどう解釈すればいいのだろう。
黙ってやるという以上、やりきれるということであり、事実として既にやりきれていないのだ。

「面倒な死に方をしてくれたもんだ。こんなことに関わるくらいなら、西海岸の連続殺人鬼を追っていたほうがどれだけましか」
頭を掻きながらそう言った男はウォーカーに向かい合って座った。暑そうな紺のジャケットを着た長身の人物だった。
「……それで実験の途中に急にお倒れになったと、お話によるとそういうことでしたね？」
ウォーカーは手を休めずに答えた。
「そうです、蘇生法を幾つか試してみましたが……無駄骨でした。彼に持病はありませんでしたから、心臓発作でも起こしたのではないのですか？　疲労も溜まっていたはずですしね。ええと……」
「失礼、エリック刑事部長です」
長身の男はそう名乗ると、胸ポケットから手帳を取り出した。付箋が貼られたページを開くとエリックは続けた。
「あなたと亡くなったギデオン氏は脳の研究をされていたとか」
「それがなにか？」
「詳しくお聞かせ願いませんか？　少しばかり興味深い符合なものですから」
ウォーカーは眉をひそめた。ペンを放りだすと仕方がなさそうに書類を脇に除けた。
「今世紀に入ってから医学の進歩は著しく、以前では切断しか考えられなかった状況でも、元通りに手足を治したり、内臓の奥に潜り込んだ菌を撲滅することが可能になりました。しかしそれも限度があります。そこで、治療不可と判断された場合は部位を除去し新たな腕や内臓と交換するケースが時折発生します。従来まではそうなるとやっかいで、迅速にドナーを見つけることはとても難しかった。しかし義足や義手、人口臓器の技術が発展しその問題はほぼ解決できたと言っていいでしょう。安価で本物と大差のないものが手に入るようになりました。しかしこれだけ技術が進んでも一つ代用品を作れずにいる器官がありました」
「それが脳だというお話ですか？」話の腰を折ると、エリックはな

にか手帳に書き込んだ。ウォーカーは続ける。
「……脳は代用が効かない器官であると今まで考えられていました。なぜなら脳が司る精神が人間そのものを決定づけるのであり、脳を変えるということは別人になるということを意味するからです。ではそもそも精神とはなにか？　これは既にはっきりしていて、脳内物質の化学反応が表現する電気信号です。
　従って人は電子の動きそのものである、人＝電流なのだと我々は考えました。ということは外部からの刺激に対して、オリジナルとまったく同じ電流を発生させる回路を作成できれば、同じ人間のまま脳を交換することが可能であるはずなのです。電波遮蔽の為に金属の箱に回路を詰め込み、各神経と接続すると患者は病んだ脳を自分のまま取り戻すことができる。万が一に備えて、バックアップを作っておくこともできる」
「はあ……。　まるでロボットを作るようですね。確かにあなたの言う理屈もある程度理解できますが、仮に実現できたとしても、それは人間であると言えるのでしょうか」
「人間ですよ。あなたと同じようにね」
　ウォーカーは不思議そうに答えた。彼にとっては一と一を足すと二になるのですか、と訊かれたようなものなのだろうか。
「例えば、体すべてを義手などの代用品に変え、あなたがおっしる回路を頭に埋め込んでいたとしても？」
「もちろんそれは人間です。先ほども説明しましたが、人間＝精神であり肉体＝人間ではない、従って元々の人体が無くなったとしても、精神を保ち続けていられるのならばそれは間違いなく人間なのです。少なくとも、私はそう考えています。ギデオンも同じでした」
　エリックは手帳を閉じた。
「では、ロボットと人間の線引きはどこにあるのでしょうかね？　生まれ方の差でしょうか？　三原則を恣意的に破れるか否か？」
「私に言わせるのならばどちらも同じですよ。人間の精神を持っているのならば、元々の素材が違うだけに過ぎない。昔？アンドリュ

ーＮＤＲ１１４？という映画がありましたね。うろ覚えですが、確かラストシーンで元々ロボットとして作られたアンドリューは、法的に人間であると認められていました」
「あの映画なら私も観ました。しかし？彼？は精神云々ではなく、自分を死ぬ体にすることによって人間であると主張していましたよ」
「そうでしたか？」
「しかし、聞けば聞くほど現実離れしているように思えてきますが……。本当にそんなことが可能なのでしょうか？」
「できますよ。事実できたのですから」
エリックは眉を潜めた。
「それは、人体での実験を行ったという意味ですか？」
「一度だけ。無論本人からの同意を書面で得ています。必要なら後で提出しましょう。法的に問題はないはずです。このプロトタイプの実験は成功し、被験者は今も生きています。機械の脳のままで」

少し思い当たることがあり、私はまたパンフレットを開いた。ＯＴＣの紹介に書いてある有川東の経歴を読み直した。地元の某大学で教授を務め、研究に明け暮れていたが父の死をきっかけに退職し劇団を立ち上げるとある。彼の研究とはこのことなのではないか？
妄想狂という仇名も、このＳＦめいた研究を揶揄したものなのではないか？　私はまた妄想に浸りそうになったがすぐに自制してパンフレットを閉じた。しかしありそうなことだ、同じ思考を何度も飴のように舐めた。

「それで、あなたの言う符合とはいったいなんです？」
あまり興味がなさそうに、ウォーカーは訊いた。書き仕事の続きをしたいのだろう。
「彼の死因についてですよ」
ウォーカーは手帳をしまうと、両手のそれぞれの指を合わせて肘をついた。コールドリーディングでも始める風に見えた。

「あなたは先ほど心臓発作だろうと想像されましたが、それは外れています。ギデオン氏の死因は脳が消えたことです」
「判りませんね。消えた、とはどういう意味です？」
一瞬だけ手を止めてウォーカーは訊いた。
「溶けたんですよ」
「溶けた……それは何かの比喩的表現ですか？　彼は麻薬の類には手を出していなかったはずですが……」ペンを回しながらウォーカーは顎を撫でた。
「言葉通りの意味です。ギデオン氏の脳は物理的な意味で溶け、消えたんです」
「はあ……」気の抜けた顔でウォーカーはペンを回し続けた。
「何かの病気だったのですか？　そんな症例は聞いたことがないが」
「いえ、病気ではありません。あなたが先ほどおっしゃったように、人間の精神は脳に流れる電流だそうですね。そして特定のパターンの電流によって、ある種の電磁波は発生することがあるそうです。そしてこの電磁波は人の脳を溶かしてしまうのだそうです」
ウォーカーは笑った。
「リアリティがないな」
「あなたの研究だってリアリティがないように私は思いますが。それに事実は小説より奇なり、という言葉があるじゃありませんか」
「誰が最初にそう言ったのかは知りませんが、よっぽど詰まらない小説ばかり読んでいたんでしょう。ともかく続きを聞かせてください」
そう言うと、ウォーカーは胸のポケットにペンを差した。いくらか興味を持ったようだった。咳払いをしてエリックは続けた。
「これはつい最近判ったばかりのことで、まだ一般的には広まっていません。検視医などの一部の専門家に知られている程度です。さて、この電磁波には幾つか特徴がありましてね。　まず一つ、この電磁波は非常に強い悪意によって発生します。現在判っている限りでは、他の感情の電気信号では起こり得ないようです」

「……つまり悪意を抱いただけで人が殺せると？」
「まあ、そういうことになってしまいますね。非常に稀にしか見られないようですが。と言うのも、この悪意はかなりの強さでなくてはならないからです。この電磁波は、発生した瞬間だいたい半径二十メートル程度の距離まで伝わり、それ以上離れると殺せないようです。脳が溶けると鼻から液状化したものが垂れてくるので、知ってさえいればすぐに死因が判ります。この液状の脳に残った電磁波を調べると、指紋のように個人を特定することができるそうです。しかし比較するサンプルを対象から採取する方法が今のところ確立されていないようです。ですから、残念ながら指紋のように関係者全員からサンプルを集めて突き合わせる、ということができません。それと、これが一番重要なのですが、影響を受けるのは悪意を向けられた本人だけで、周りに第三者がいても電磁波で脳が溶けることはありません」
「となると、犯人は必ず被害者の顔見知りでなくてはならないということですか？」
「当然そうなります。知らない人間には悪意の持ちようがありませんから」
「……ということは彼女ではあり得ないのか、彼女は生前ギデオンに直接会ってはいなかった。術式中は昏睡していたのだし……」
俯いたままウォーカーは口をほとんど動かさずに言い切った。
「何か、おっしゃいましたか？」
「いえ、何も。一つ質問があるのですが、この事件はいったいどういう扱いになるのでしょうか？」
「今のところ、殺人事件として扱っています。文字通り第三者の悪意ある行動によって被害者が死んでいるのですから。陪審員がどう考えるかはまた別の問題ですが、我々にとっては直接関係ない話です。まあ最終的には、悪くても過失致死程度に落ち着くのではないでしょうかね。酌量の余地が十分ありますから、実刑というのはまずないのでは。……ところでこの自宅兼研究所はあなたが相続され

るそうですが、彼には親族はいないのでしょうか？」
「……」
エリックがどう話を運ぶつもりか察したらしく、ウォーカーは唇を歪めた。大きく溜息をつくと、背もたれに寄りかかり楽な姿勢をとった。
「一人だけいるにはいます。確か西海岸に甥がいるとか……」
「そうですか。名前は？」
「ジャック・ハドソンだったと思います」
「では御友人は？」
「いませんね。昔はどうだったか知りませんが、ここ数年彼はずっとこの研究所に引きこもっていて、その間誰かが訪ねてくるということもありませんでした。山間部に建った家ですから、周りに民家もないので近所つき合いなんてものも皆無でした」
「そうですか。後でそのジャック・ハドソン氏にも当たってみましょう」
「エリックさん、あなたは私が犯人だと思ってらっしゃいますね？」
「それはどうでしょうかね」
エリックは微笑んだ。
「誤魔化す必要はないでしょう。今の状況で私を疑わないというのならそれこそどうかしている。しかし私ではあり得ないのですよ。私は彼を殺していない」
ウォーカーは声を荒げず落ち着いて言った。
「ほう……まあいいでしょう。そろそろ一通り作業が終わるようですから、続きは一度私の署に来ていただいてからでよろしいですか？」
「……判りました。着替えてから、伺います」
「ではここでお待ちしていても構いませんか？」
「どうぞ、しかし絶対に書類には手を触れないでください」
ウォーカーはエリックを残したまま席を立つと、上手に退場した。それから十秒ほど間を置いてから、シーリングライトが消え再び暗

転になった。エリックが音を立てないようゆっくり立ち上がるのが判った。舞台袖から数人出てくると椅子やデスクを慌ただしく片付け始め、エリックも椅子を運んで手伝ったようだった。

やがてシーリングが点いた。舞台にはクローゼットが中央の奥に一つ置かれているだけで、他には何も道具はなかった。クローゼットの前に男の子が一人はいつくばっていた。五歳くらいだろうか。泣き腫らした目を擦りながら嗚咽を漏らすとゆっくり立ち上がった。

「何してるんだ。私の部屋で」

下手から声がした。よれよれのセーターを着た男が歩いてきて、子供の傍まで近づくとじっと見下ろした。

「お父さん……」

男の子は幾らか安心したようだった。

「プライス、勝手に入るなといつも言っているだろう」

確かプライスはジャックの子供だとパンフレットにあった。ということは彼がジャックなのだろう。ジャックは子供の視線の高さまで腰を落とした。

「中にいる人は誰なの、お父さん」

震えた声でプライスは訊いた。プライスの頭をゆっくりと撫でてやった。

「この中を見たのか？」

「廊下を歩いてたら、変な臭いがしたんだ」

スポットライトが二人を照らすと、シーリングが少しずつ弱まっていった。プライスは続けた。

「それで気になって、部屋に入ったんだよ。このクローゼットから臭いがしてるみたいだった。臭いがこもってたから、窓を開けてクローゼットを見たら……」

立ちあがると、ジャックはクローゼットの扉を開けた。中には段ボールが一箱入っていた。ジャックは扉を閉じこちらを向くと顔をしかめて言った。

「なるほど、これは確かに臭うな。ドライアイスが足りなかったか……」
「ねえ、お医者さんを呼ばなくていいの？」
プライスはジャックにすがりついた。弱々しいがしっかりと通る声だった。ジャックは頭を軽く叩き、撫でた。
「あの人全然動かないんだ！　顔も真っ青だし――」
「箱の中も見たんだな？」
目を擦りながらプライスは頷いた。
「そうか、見たか……」
ジャックは困った生徒を見る教師のようだった。父親の様子がおかしいと思い始めたのか、プライスは父親の手をどかし、助けを求めるように周りを見回した。ジャックは少しの間、新しい数式を見つめるようにプライスを見ていた。ある公式が当てはまることを発見したのか、満足そうに頷くとプライスに詰め寄った。
「お父さん……そうだ僕お医者さんに電話してくる」
プライスが下手に駆けだそうとすると、ジャックは襟首を掴んで引き戻した。プライスは明らかに父親に怯え始めていた。もしやまた先ほどのような演出をするのだろうか――？
私は不安になった。
「お医者さんを呼ばなくちゃ、どいてよ」
「呼ぶ必要はない、もう手遅れだ。この人はずっと前にもう死んだ」
「……もしかして、お父さんがやったの？」
プライスは判り切ったことを訊いた。「そうだよ」と、明日は日曜日だよ、と言うように落ち着いてジャックは答えた。
「どうして？　あの人悪い人なの？」
「悪い人？　なぜそう思う？」
「だって、何かお父さんに嫌なことをしたから殺したんじゃないの？　そうじゃなきゃ、お父さんが殺す理由がないよ」
「悪い人かどうかは知らないが、少なくとも私が彼に何かされたわけではない。単に目に留まったから、選んだだけだ」

「じゃあ誰でも良かったの？」
「そうなるな」
「どうして？」そう言うとプライスは目を擦った。その際に目薬を垂らしたのか、手をどけると涙が流れていた。ジャックはズボンのポケットから何か取り出して弄んだ。折り畳んだナイフのようだった。
「何か理由があるんでしょ？　聞かせてよ」
「なぜ訊く？　気を逸らさせて逃げる機会を窺っているのか？」
「どうして僕がお父さんから逃げるの」
プライスは無理に笑って言った。
「なあプライス、お前は年の割には頭が回る子だ。私が今から何をするつもりか、判らないわけじゃないだろう……？」
そう言いながらジャックはナイフの刃を出した。二人は十秒ほど向かい合っていた。プライスが金切り声を上げて逃げだした。すれ違う瞬間に先ほどと同じように襟首を掴んだジャックはそのまま引き戻し、腹を思い切り殴りつけた。やはり私の予想は当たった。低く呻いてプライスは跪き、ジャックは顔に膝を叩きつけた。私の胃袋の中酸が過剰に分泌され始めた。プライスは仰向けに倒れた。鼻血が頬を伝った。骨が砕けたのか鼻がつぶれている。
「お父さん……」　プライスが息を荒くして何とか声を絞り出した。
「話さないよ、絶対に。ずっと黙ってるから。嘘じゃない、約束するよ」
ジャックはプライスに屈みこんで頷き、ナイフを弄びながら言った。
「そうか、黙っているか」
「うん、約束する。絶対に話さない」
「だがなプライス」ジャックは手遊びを止めた。
「どちらにせよ、最初から私は次にお前を殺す気でいたんだ」
ナイフを振り上げて、ジャックは左胸の辺りに突き立てた。急所からは外れているように見える。プライスは小さく悲鳴を上げると

ぐったりとした。しかし小さく胸が動いているので、実際は命に別条はないらしかった。プライスが着ているポロシャツに血が滲み、傷口から垂れた。ナイフが蓋になっているので大した出血ではなかった。喉に胃液が込み上げ吐きそうになったが私は何とか飲みこんだ。ジャックは立ちあがると嬉しそうににやにやと笑みを浮かべてプライスの頭を蹴った。

笑みが消えた、と思った次には彼は気分が悪そうに顔を歪めていた。鼻から茶色い液体が垂れていた。そのまま彼は後ろに倒れた。白目を剥くとしばらく痙攣し、動かなくなった。スポットライトが虚しく二人を照らしていたが、やがて消され暗転になった。

明りが消えると、上手から人が出てきて男の子を立ち上がらせると、ゆっくりと退場した。何人かに抱えられクローゼットが下手に運ばれた。ジャックだけがしばらく舞台に取り残されていた。下手から人が二人出てくるとジャックの手と足を持ち下手へ運んで行った。吐き気こそ一段落したが、私は体がだるかった。観劇にここまで神経をすり減らしたのは初めてだった。

頭が痺れる、妙に熱っぽい。風邪でもひいたか。水を飲みに席を立とうかとも思ったが、立ち上がるのも億劫で結局そのまま座って、うずくまっていた。

場面は再び故ギデオンとウォーカーの研究所だった。エリックと会見した部屋である。前の場面と同じようにウォーカーは書き仕事をしていた。そしてエリックも前の場面と同じように下手から舞台へ出てきた。何かが入った茶封筒を抱えている。エリックは封筒をデスクに置くと、そのまま何かを考えながらうろうろとデスクの周りを歩き始めた。ウォーカーは冷ややかな目でエリックに一瞥をくれて封筒を開けた。

「何ですか、これは？」ウォーカーが訊いた。

「死亡診断書です」

「はあ……ギデオンのものなら既に受け取りましたが」

「ギデオン氏ではなく、以前あなたがおっしゃっていた……ええと、ジャック・ハドソンでしたか？　ギデオン氏の甥のものですよ。どうやら彼が犯人ではあり得ないようですね。彼はギデオン氏が殺された時刻より少し後には、ここから二百キロ離れた西海岸の自宅にいたことがはっきりしています。彼もまた亡くなっていたんです。興味深いことに、彼の死因もまた脳を失ったことだそうで。ところで、西海岸で起きていた連続殺人のことは御存知ですか？」

「いえ、すみませんが世情には疎いもので……」

「そうですか。老若男女問わず狙った通り魔的な連続殺人だったのですが、どうやらジャックはその犯人だったようなんです。彼の自室のクローゼットから、段ボールに詰められた刺殺体が発見されました。手口も同じですし、死体に残された汗などの遺留物からみても間違いないようです。

それともう一つ、彼が発見された際息子のプライスも一緒に発見されているのですが、どうやら彼はジャックに殺されたようなんですよ。プライスの心臓に刺さっていたナイフはジャックの物で、残っていた指紋は本人のものだけでした。段ボールにはプライスの指紋も残っていたそうです。――言い忘れていましたが、彼らが発見されたのは、段ボールのあったジャックの自室で、ジャックとプライスの死亡時刻もほぼ一致しています。整理すると、こういうことになりますね」

デスクの横でエリックは足を止めた。

「ジャックには秘密の楽しみがあった。息子プライスはそれを知ってしまった。ジャックは自分の息子を刺殺し口を塞ぐまでは良かったが、その瞬間何者かからの悪意を受け息絶えた……」

エリックは眼を閉じるとゆっくりと後ろに倒れた。

「何者か、なんて持って回した言い回しをしなくても明らかではないですか。自分の息子と刺し違いになったのでしょう」

「ところが、そうとは思えないのです」

勢いよく上体を起こしてエリックは言った。肩を回しながら立ち

上がると服の汚れを払った。
「というのも、ジャックの脳から採取されたサンプルと、ギデオン氏から採取されたサンプルが同じものだったのですよ。もしプライス少年が犯人だとすると、二百キロの距離はどうなるのか？　ちなみに駄目押しをしておくと、プライス少年は死亡するほんの二十分ほど前まで近所の友人と一緒にいたことが確認されています。二人が死んだのは実はここかその近辺で、後から運ばれた、なんて手も通用しません。だいたいそうでなかったとしても、運ぶ理由が見当たりませんが」
　エリックはウォーカーの反応を窺った。彼は流石に書き仕事をやめていて、ペンを回しながら強く瞬きを繰り返していた。

　私の頭にはまだ薄い霞がかかっていて、二人の話についていけているか怪しかった。シモーネたちはどうなってしまったのだろう、とまた前と同じ思考を繰り返していた。

「――理解していただけていると思いますが、以前にもお話した通り、私は犯人ではありえませんよ」
「ええ、それは判っています。あなたは犯人ではあり得ない――CTスキャンで画像まで撮って確認しましたからね。オリジナルの脳を代用品に交換したあなたは、悪意で人を殺せないし殺されもしないのですから。電磁波を遮断する箱に回路を詰め込んでいるわけですから」
　エリックは椅子に腰を下ろした。疲れが出ているのか眠そうに見える。こめかみを指で押さえながら彼は言った。
「――しかし、そうなるとどこに犯人を求めればいいのでしょうね。誰かに殺されたことは確かなのですが」
　黙って考えにふけっていたウォーカーが口を開いた。
「……亡くなる直前、ギデオンは妙なことを口走っていました」
「妙なこと？」俯いていたエリックが顔を上げた。「いったい何で

すか？」
「私たちが認識している現実は、実は私たちが考えているようなものではなく、例えばある舞台の一幕なのではないか？　ということです」
「……はあ？」
エリックは口を開けた。蠅が飛び込めばそのまま飲み込んでしまいそうだった。

私は何かとてつもなく嫌な予感がした。そして往々にしてそういった予感は当たってしまうものだ。

「おっしゃりたいことが良く判りませんが……」
エリックは手で顎を押して口を閉じてから言った。
「待ってください、まだ頭の中でまとまりきっていないのです。……少しずつ整理しながらお話しましょう。もしこれが本格ミステリならば、読者が怒り狂いそうな話なのですが」
ウォーカーはぎゅっと目をつぶると肘をつき、手を合わせた。呼吸が荒くなっているようだった。胸が大きく動かしている。
「はあ……まあお伺いしましょう。手掛かりになるかもしれません」
エリックは手長を取り出し、まずそうにペンを舐めた。椅子に深く座りなおすと手で続きを促す。
「ところで、ディクスン・カーという作家をご存知ですか？　その筋の読者には有名な、アメリカの推理小説作家なのですが」
「名前は聞いたことがある気がします。読んだ記憶はありませんが。たしかヘンリーという探偵が出てくる話を書く人でしたか？」
「ヘンリー・メリヴェール卿ですね。厳密に言うとヘンリー卿はディクスンカーではなくカーター・ディクスンという、彼の変名で書かれた作品に登場するのです。今、私が問題にしたいのは、彼のもう一人の探偵、フェル博士が登場する『三つの棺』という小説です。密室殺人を扱ったものなのですが、終盤にフェル博士は突然、密室

講義なる名目で密室を扱った推理小説を論じようとします。ペチスという人物が、なぜ今推理小説を論じるのか、と訊くとフェル博士はこう答えます。

?われわれは推理小説の中にいる人物であり、そうでないふりをして読者たちをバカにするわけにはいかないからだ。手の込んだ口実をつくりだして、推理小説の論議に引きずりこむのはやめようじゃないか。書物の中の人物たちにできる、もっとも立派な研究を率直に語ろうじゃあないか?

自分たちが小説のキャラクターであることを認めるんですよ」

「はあ……確かにギデオン氏の言ったことと、何か関係がありそうではありますね」

エリックはそういうと爪を噛んだ。スポットライトで汗をかいているのか化粧が滲んでいる。ウォーカーは続けた。

「私の考えを話すための前提として、私も認めようと思うのですよ。つまり、私はこの『有形の悪意』という芝居に登場するキャラクターである、ということをです。もちろん今言う?私?とはこのウォーカーという人物を指すものです」

私はやはり話に追いつけていなかった。いったいこの話はどう決着がつくのだ。 前にも感じていたが、パンフレットのあらすじは破綻している。その上今度は、私は架空の人物だと言い出した。いや、確かにそうなのだが――。

両手で頬を叩いた。ともかく話に集中しよう。エリックは目に見えて動揺していた。何か言いたそうにしているのだが、適切な言葉が見つからないらしく、結局何も言わず手長を閉じた。成り行きに身を任せるという風に見えた。

「まあ聞いてくれ福本――混乱しそうだな。あくまでエリックに話しているという形を取ろう。ウォーカーがエリックに話すという形だ――まあ聞いてくれエリック。今の前提を踏まえて私の考えを話

そう。考えというのは無論事件の真相だ」
「君の言う事件というのは……ええと、その……」
「この一連の殺人についてだ。決まってるだろう？　いや――判るよ、君が言いたいことは判る。どう言えばいいかな……君は頭の中で区別して捉えているんだろう。それはまあ当然なんだが、今私はあえて同じものとして扱うつもりなんだ。まずは最初の問題から考えていこう、殺されたのは誰か？　君はそんなのギデオンとジャックに決まってる、と言うだろう。確かにそうだ。ギデオンとジャックは死んだ」

なら被害者は明らかだ、私はまた混乱し始めた。こいつは何が言いたいのだろう。

「本当にそうなのか？　それだけなのか？　私は否だと思う。なぜならあの二人だけが死ぬという状況はありえなかったからだ。この話の中で二人はどうやって死んだ？　ギデオンはこの自宅兼研究所で、ジャックは西海岸の自宅で、二人はほぼ同時に悪意で死んだ。君の話だと約二百キロ離れているそうじゃないか。この距離の問題はさっきも話題にあがったね。しかもこれはただ距離を超えればいいって話じゃない。
凶器は悪意なんだ。意図的に使えるものじゃない。あくまで自然に悪意を抱いたはずなんだ。まとめると、たまたま何らかの方法で二百キロ離れた研究所とジャック宅を一瞬で移動してみた結果、たまたまその両方にいた人物に強い悪意を抱いた――言っとくが、モニタ越しに二人を見たんだろうなんてのは、なしだ。悪意を抱いても届かないからな。
それで、私の答えはこうだ。ありえない、そんなことは起こりえない。……こんな言い方は反発を招きそうだな。ありえないというのは言いすぎかもしれない、犯人は何か超能力を持っていたのかもしれないしな。私はそう考える、という言い回しに留めておこう。

さて、多分ここにいる方々にも、私の言いたいことが判ってきただろうと思う。この問題は彼ら二人だけが殺されたのではないと考えればすぐに解決するんだ。殺されたのは四人だった。ギデオン、ジャック、有川東、友永秀正の四人だ」

ウォーカーはそこまでまくしたてると一息ついた。いや違う、あくまで今はウォーカーがエリックに話しているのだ。私は必死に整理した。

「つまり役者の有川と友永が死んだから、その結果として役のギデオンとジャックも死んだ、と言いたいのですか？」

「そう、そうなんだ。これで矛盾は消えるだろう？　役者は話のあらゆる因果律を無視して、話に影響を与えることができるからね。通常はみんなほぼ脚本に従うから、その特権もあまり問題にならないが。

もしかしたら、今の私の説明が周りくどいと感じる人がそちらの方々の中にはいるかもしれない。が、思い出してほしい。私は今ウォーカーとして、事件を解決しようしていて、さらに役の私たちにとっての事件は、当初ギデオンとジャックが殺されただけだった。そして観劇しているそちらの方々にとってもそうなのだから、死んだのは有川と友永で、という風にすっ飛ばして考えるわけにはいかない。まずウォーカーとして被害者を特定するこのプロセスは必要なんだ。――さて、そこまで理解してもらえたなら、ここから先は坂本達人として話を進めていくぞ。

現実として存在した有川と友永が死んだ、という私の説にこんな疑問を持ちうるかもしれない。この劇はメタ的な視点を扱う話で、実際の有川と友永は生きて今も舞　今日この台袖で成り行きを見守っているのでは？　演目を見に来ている方々はほぼ常連の方で、何度も有形の悪意を観劇している方達には反証する必要がないが、聞くことろによると、初めていらしたという方も一人いるそうなので一応反証しておこう。お手元のパンフレットをご覧ください、こうあらすじが書いてあるはずだ。

？二人の科学者にとらえられた少女。残酷な実験に耐えかねた少女は脱出を図る。マッドサイエンティストの手から逃れることはできるのか！？

いったいこのシモーネって少女はどこに行ったんだ？明らかに話は大詰めなのに、一度出てきただけで後はまるで出てこないじゃないか！　これは元々の話が破綻していることの証明になるのではないか？　役者たちは突然の仲間の死で通常の話を進めることができなくなり、元々あった設定や、その場の思い付きを苦し紛れにつぎはぎして、即興芝居をでっちあげていただけなのだというね。

具体的な話をしよう。まず冒頭からシモーネへの実験までは筋書き通りだ、これは言わなくても判ると思う。変化が出るのは有川、即ちギデオンが倒れてからだ。あのとき私はかなり慌てて、ともかく後先考えずにアドリブで繋ぐと舞台袖に引っ込んだ。シモーネを処分すると口走ったせいで後の展開を苦しくしてしまったのだが、ともかく私はどうにか舞台から逃げ帰った。

次の場面は……君が研究所でウォーカーに質問をする場面だったな。ここはかなり変わっている。本来実験の次はシモーネとウォーカーとが話をして、彼女の言動に怒ったウォーカーが虐待を加える場面だった。そもそも君は登場すらしていなかった。こうなったのは前のシーンでの私のアドリブの所為なのだが、今にして思えばなんのかのと屁理屈をつけてシモーネを出していけたような気もするが、これも結果論だろう。とにかく皆慌てていたからね。このとき話した脳の代用品の研究や、悪意の設定は元々あったものだ。ミステリ風に苦し紛れに繋いでいくことになったんだ。

で、次は我らが切り裂きジャック氏の活躍か。実はここはほとんど変わっていない。実験とほぼ同時刻という設定も本来のものだし、彼が一連の連続殺人の犯人で、子供にばれたから殺してしまうってのもそのままだ。ただ、ジャックが死ぬことだけは予定外だった。この予定外というのは、当然このつぎはぎ即興劇のなかででも予定外だったということだ。我々はまたしても困った事態に追い込ま

れたわけだが、とにもかくにも暗転まではきっちり繋げることができた。
　そして今の場面になるわけだね、これは直前に私が提案した場面だ。というのもジャックの場面が終わったとき、私は真相らしきものを掴んだのだ。というわけで、これまで積み上げた設定をもちいてこうして推測を語っているんだ」
「そんな芝居をする必要がどこにあるんだ！　さっさと警察でも呼べばいいだろう！」
　私は叫んでいた。すぐに後悔したがもう遅い。坂本は呆けた目で私を見たが、それも一瞬で、ニッと笑った。
「なるほど、確かにそうです。すぐに警察と救急に電話、その後公演は中止にして、お客様にはその場にとどまっていただくのが当然の筋でしょう。ではなぜ我々はそう対応しなかったと思いになられるのですか？　事実そうしているのですよ。警察と救急にはとっくに連絡済みですが、雪がひどくなってきたそうで、到着は遅れそうだと言われました。客を帰さないでくれとも当然言われています。判りませんか？
　だからですよ。お客様にパニックを起こさせず留まらせる最善の方法は、これしかないでしょう？　劇を無理矢理にでも続けること。
　ついでに言うと、私が今事件を暴きだしたということはこういうことも言えるでしょうね。警察も救急も、もうじきに到着するとね。だからこそ、今までの積み重ねを崩して話しているのですよ。
　そろそろ、Ｗｈｏ　Ｄｏｎｅ　ｉｔ　に話を移しましょうか。最初にも言いましたが、本格好きの読者が聞けば怒るような話です。まあ？そこはそれ――？
　ええとそれで、Ｗｈｏを指摘するためにまず我らが団長有川について説明する必要があります。お手持ちのパンフレットをご覧ください。たしかこのＯＴＣの名前の由来が簡単に書いてあったはずです。？　Ｏｂｓｅｓｓｉｖｅ　Ｔｈｅａｔｒｉｃａｌ　Ｃｏｍｐａｎｙ　？妄想狂の劇団というのがこの劇団の名前です。さてその由

来というのが、書いてあると思いますが、有川が以前大学教授だった頃の仇名が？　妄想狂？だったことから来ているのです。妄想狂とはずいぶんな失敬な仇名だとは思いませんか？　こんな仇名がつけられるには、もちろん理由がありました。

彼が発表した論文があまりに荒唐無稽だったからです。最後まで言う必要もないかと思いますが、説明すると人間のある感情、つまり強い悪意によって人が死ぬ、という研究成果を発表したのです。大部分の人間が有川の論文を嘲笑い、彼を妄想狂と呼びました。しかし一部ではこの論文を評価する人間も現れました。そしてほどなくして、実験で彼の理論は正しいことが証明されました。

ですがこの研究成果は一般的にはほとんど知られていません。検視医などの専門家や学者、もしくは我々のような彼の身内が知っている程度です。この劇は、彼の研究をガジェットにして作られていたわけですね。有川と友永の死体からは液状化した脳が流れていましたから、死因は私たちにはすぐに判りました。本当に彼らは悪意で死んでいたのです。

そもそもなぜ彼らは悪意を持たれたのでしょう？　彼らが死んだ瞬間のことを思い出してみましょう。彼らはいずれも過激な演技、暴力をふるっていました。一度ならたまたまということもあるでしょうが、二人ともそろって暴力をふるった瞬間、及び直後なのです。これが原因である、と考えるのが自然だとは思いませんか？　ではそれに最も悪意を抱くとすれば誰か？

シモーネ役の池川直美でしょうか？　プライス役の安藤慶一でしょうか？　なるほどどちらもありそうな答えです。しかし彼らだとするとやや不自然な点があります。考慮すべきはこの『有形の悪意』が上演されるのは初めてではないということです。

つまり彼らは何度もこの役を演じていて、有川の方針もよく知っているのです。にも拘わらず、彼らはそれほどの悪意を抱くまで辞めずに続けるということがありえるでしょうか。さっさと辞めてしまえば済むことです」

不意に劇場の扉が開いた。制服を着た警官や救急隊員が堰を切ったようになだれ込んできた。
「今までは一度たりともこんな事態にはならなかった……しかし今回起きたということは、つまり、今までは存在しなかったが、今回だけは存在していたある要素が原因であり、その要素そのものこそが犯人なのです」

黒ビロードのカーテンは、そのとき、わずかにそよいだ。小さな痙攣めいた動きがすばやくはしりぬけると、やおら身を翻すようにゆるく波を打って、少しずつ左右から閉ざされてゆき、辞儀をする青年の影を、いま、まったく隠し終わった。

了

主な参考資料
・ジョンディクスンカー「三つの棺」
・中井英夫「虚無への供物」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6713l/

有形の悪意

2011年4月11日03時25分発行